

佳作

「私の未来は、なに色？」

—また、色が足されてゆく。—

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校 二年

渡 邊 溪

嬉しいこと、悲しいこと、驚いたこと。心に響く事が起きるたびに、『僕はまだ生まれたばかりの赤ん坊で、これは自分が見ている夢なのではないか』と迷ってしまう変なところが僕にはある。なぜそんなことを思ってしまうのか、自分でもよく分からない。時間が過ぎて行くのがもったいないと思ってしまうところがあるのかもしれない。

こんな自分に「私の未来は、なに色？」と問いかけてみたら答えは『透明』だった。ちょっとカッコつけているように聞こえるが、何度問いかけてみても答えは変わらない。僕の未来はまだ何色にも染まっていないのだ。だが、この先何色かに染まっていったとしても透明に少しずつ色が入っていく

のだから、しばらくは向こう側がうつすら見える程度の色なんだろう。

しかし、全く目標が定まらないから「透明」などと言っているのではない。ちゃんと僕には夢がある。薬に関する研究職に就くことだ。

兄弟のように付き合っていた親戚のKが亡くなったのは僕が四年生になったばかりの頃だ。Kは五年生になったばかりだった。脳腫瘍という病気になってしまったKは、腫瘍のできた場所が悪かったらしく、手術することもできなかった。後から聞いた。ただ、最初の頃はとても元気で、検査で入院した後は自宅療養だったから、お見舞いに行つたついでによく一緒にゲームなどをして遊んだ。テレビゲームやベイブレードをしたことを今でも思い出す。

脳腫瘍と診断されてたった半年でKは亡くなってしまった。あんなに元気だったのに、あつという間に寝たきりになってしまつて、最後は言葉が上手く話せなくなつていった。たった半年でだ。

お葬式にはとてもたくさんの方がやってきた。親よりも先

に子どもが亡くなってしまうことがあるのだととてもショックだった。

葬儀の後、Kを乗せた車は通っていた小学校の運動場に入っている、運動場には全校生徒が運動場で人間の輪を作っている。立っていた。その場の周りを車はゆっくりと一周しながらあさいさつして回った。泣いている人をたくさん見た。おじいちゃんやおばあちゃんばかりじゃない、子どもだって死んでしまふのだと、きつとあそこに立っていた子どもたちは気づいただろう。

Kの事があってから、僕の中にほんやりとした目標ができた。「薬の研究をしたい」という事だ。薬について学び、効果のある薬を作りたい。目標ができれば、それを実現させるための小さな目標が決まってくる。まずは大学に進学するため、普通科のある高校に入った。今はまだここだ。この先に大学進学のための受験が待っている。先日オープンキャンパスに行く機会があった。そこで見た先輩たちは活き活きと学び、自分たちの大学を誇りに思っていた。目標を持ち一生懸命研究している姿はまぶしかった。こうやって輝くために僕

は何をすればいいか、何から始めればいいか……。悩んで、考えて、そうやっているうちに透明な僕の未来は少しずつ色が足されていく。ほんの筆先くらいしか色は入っていないのでまだ透明のままだが。べたつとした向こう側の見えない色は嫌いなので、向こうが薄く見えるくらいのこの状態がずっと続くのもいいかなと思っている。

Kと僕は一歳違いだった。きつとこれからもKの家族は僕を見るたびに、「Kが生きていたらこのくらいで、こんなことをしているんだろう」と考えられると思う。そう思ってくれることでKの家族がKをリアルに感じ取れるのなら、僕は役に立っているんだろう。だから大きなことを言うようだが、僕の人生はKの人生にも重なっている。Kの未来は何色だったんだろう。やはり僕と一緒に向こうが見通せるくらいの薄い色だったんじゃないかと僕は思う。向こうには何が広がっているのだろうか。色が薄くてもいい。

僕の未来は、『透明』だ。